慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南アラビア・ハドラマウト出身者の伝記集： 学者・スーフィーの移動や知識伝達分析の準備作業として
Sub Title	Biographical collections of the people of Ḥaḍramawt : for an analysis of the movements of Sufi-scholars and the transmission of knowledge
Author	新井, 和広(Arai, Kazuhiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.36 (2021.) ,p.77- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20210630-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南アラビア・ハドラマウト出身者の伝記集

――学者・スーフィーの移動や知識伝達分析の準備作業として[1]――

新　井　和　広

はじめに

本稿の目的は，南アラビアのハドラマウト地方出身者（ハドラミー）に関連する伝記集の情報を整理し，当該地域の学者やスーフィーのネットワーク分析の準備作業とすることである。イスラーム世界における歴史記述の特徴のひとつとして，伝記が多いことが挙げられる。私の調査地のひとつであるハドラマウトにおいても伝記を著すことは出来事の集積としての歴史，つまり我々が通常歴史と認識するものを著すことよりも広く行われている。また一見歴史とは関係がない宗教関連の書籍にも学者やスーフィーの伝記が多数収録されており，そこで語られる逸話は当該地域の歴史だけでなく文化や慣習に関する貴重な情報源である。

そういった伝記のスタイルはある程度定型化されていて，学者であれば学問分野，学んだ本，師，弟子，生年，生誕地，没年，没地，逸話などが含まれている。スーフィーや聖者の伝記であれば，それに加えて奇蹟に関する逸話や民衆との関係が語られる。また預言者一族をはじめとする名家

(1)　本稿は，科学研究費補助金「デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析（学術変革領域研究 A）」と，東京外国語大学 AA 研共同利用・共同研究課題「中東・イスラームの歴史と歴史空間の可視化分析―デジタル化時代の学知の共有をめざして」の成果の一部である。

の出身者の場合は詳細な血統が示される。イスラーム世界の伝記文学の歴史を概観した谷口淳一は，定型的な伝記，言い換えれば一般的な史料としての価値があまり見いだせない伝記を利用する方法として，数量的な分析の可能性を指摘している[(2)]。私自身も伝記に出てくる人名，地名，書名などにタグを付けて史料の横断検索をしたり，学者やスーフィーの移動や知識伝達のネットワークを分析したりしたいと考えてきた。多くの歴史研究者，特に若手の研究者は同様なことを考えているだろうし，実際にそういった研究も現れている。

そのような需要と関連して，最近ではデジタルヒューマニティーズと呼ばれる分野が注目を集めている。まだ新しい分野なので何をもってデジタルヒューマニティーズと呼ぶのかについて研究者の考えはさまざまである。私自身は，情報学の知見を人文科学に応用するととりあえず定義して，実際の作業としては伝記に出てくる人名，地名，書名などに，それぞれを意味づけするタグ（たとえば人名であれば師として言及されているのか，それとも弟子なのか，地名であれば出生地なのか，没地なのか，学問を修めた地なのか等）を付けて，単に検索するだけでなく，何らかの分析が可能なように加工することを目指している。私は現在，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のデジタル・ヒューマニティーズに関する複数のプロジェクトに参加しており，本稿ではハドラマウトに関連する伝記集の情報をまとめて，本格的な分析の準備作業とする。

ハドラマウトに関する史料（書籍）と所蔵状況，入手方法

ハドラマウトの歴史に関する書籍の数は限られている。その理由はさまざまで，もともとエジプト，シリア，イラクなどの地域と比べればマイナーな存在であること，白蟻や洪水等の被害によって著作が残りにくいこと，地域への印刷機の導入が遅れたこと，南イエメン時代（1967–90年）には

(2) 谷口 2005，p. 137。

宗教活動が制限されていたこと等が挙げられる。1990年の南北イエメン統一によってハドラマウトの宗教活動，学術活動が復活し，写本の状態であった作品の校訂・出版も盛んになっているが，特定の家系や人物の記録が含まれている著作の中には，関係者が出版したがらないものも存在している。また現在のイエメン共和国は内戦状態が続いており，同地における出版活動も影響を受けていると考えられる。

ハドラマウトの史料状況に関する最も基本的な研究はサージェント（R. B. Serjeant）が1950年に学術誌で公開した目録である[(3)]。本稿の趣旨と関連して注目したいのは，その目録で取り上げられている伝記集の数である。サージェントが長い批評を付けて紹介したのは40タイトルであるが，その中で伝記に関するものは７タイトルだけである。しかしそれに加えて，60タイトル（うち刊本７タイトル，写本53タイトル）の伝記（集）のリストを挿入し，短い批評を付けている[(4)]。数から見るかぎり，伝記や伝記集はハドラマウトに関連する史料の中で中核的な位置を占めていると言える。

サージェントの目録は，ハドラマウトを視察した時に集めた情報を元に書いているため，網羅的な文献目録ではないと著者本人が断ってはいるものの，リストされているのはハドラマウトの歴史を研究する際の基本的な文献であり，その価値は現在でも失われていない。しかしこの目録は出版から70年が経過しており，当時写本だったものでも既に校訂・出版されているものも相当数ある。また，記事内では写本を保管している図書館も複数紹介されているが，現在では実用的な情報とは言えない。その一方，20世紀中頃のハドラマウトにおける写本の所蔵状況を現在に伝えてくれる記録としては貴重である。

サージェントの時代から現在まで，写本の所蔵状況に関する最も大きな変化は，南イエメン時代に多くの写本がタリームの金曜モスクに付属する

(3)　Serjeant 1950.

(4)　*ibid.*, pp. 581–9. それら伝記集についての情報源はバタヴィアで発行されていたアラビア語雑誌『アル＝ラービタ（al-Rābiṭa）』である。

アフカーフ図書館（Maktabat al-Aḥqāf li-al-Makhṭūṭāt）に集められたことである。現在ではハドラマウトの写本を調べたければまずこの図書館に行くのが最も一般的な調査方法である。私が目録で調べたところ，所蔵されている写本は3,000冊以上，そのうち合本されているものを分けて考えると6,000冊以上ある[5]。また各地の宗教学校に併設されているであろう図書館や，名望家が個人的に持っている図書館にも写本がある可能性はあるが，非ムスリムの外国人研究者がアクセスするのは困難である。現地の名望家との幸運な出会いがあれば個人蔵の写本を見せてもらえる可能性もあるが，初めからそれを期待するのは無理がある。

アフカーフ図書館のほかに私が写本の存在を確かめたのはタリームにあるマルカズ・アル＝ヌール（Markaz al-Nūr）[6]という組織の図書館で，ここでは地元で個人的に保存されている写本を預かったり，必要に応じて修復したりしている。ハドラマウトの場合，個人で修復・保存を行う場合には製本する時に背表紙のあたりを木工ボンドで固めてみたり，古い書簡をラミネートしてみたりと，専門家から見れば問題がある方法が取られていることが多いが，マルカズ・アル＝ヌールではリーフキャスティングを行う装置を自分たちで作るなど，専門的な方法で修復を行おうとしている。このような試みを見ると，自分たちの文化的な遺産である写本を後代に伝えるという意識が依然強いことが分かる。

また，ハドラマウトの書店でコピーされた写本を購入できることもある。私が調査のためハドラマウトを訪問していた時期（1996, 2001, 2006, 2007, 2009年）は，ハドラマウトで最も蔵書数が多かったのはタリームの書店，

---

(5) 私の指導教官の Alexander Knysh がハドラマウトで調査を行った時に聞いた話によると，南イエメン政府がアフカーフ図書館のために写本を集めてまわった時，人びとは本当に価値がある写本は隠し，あまり価値がない写本をこの図書館に納めたとのことである。この話がどこまで真実かどうかは分からないが，南イエメンは社会主義国で宗教活動は制限されていたことを考えれば，人びとが政府機関に渡した写本の運命を心配していたとしても不思議ではない。

(6) https://www.facebook.com/283224313083（閲覧日：2021年３月19日）

Maktabat Tarīm al-Ḥadītha（Tareem Modern Bookshop）[7]だったが，私が記憶している限り2001年以降はここで写本のコピーが売られていた。コピーは白黒なので，原本では朱で書かれている部分は黒色（またはグレー）になる。写本のコピーを史料として扱えるのかどうかは研究者によって意見が分かれるところだろうが，現在ではハドラマウトでも，東南アジアでも，ハドラミーの学者や宗教者の間で写本のコピーが流通していて皆それを読んでいるという現実もある。複製する時に書き間違いがないという点では筆写よりコピー機の方が優れている。コピー機の普及と，地元の人びとの史料への触れ方の変化は興味深い問題ではあるが，本稿の趣旨からは外れるので問題点を指摘するだけにとどめておく。

ハドラマウトに加え，東南アジアもハドラミー関連の文献が存在する場所である。ハドラマウトから東南アジアへの移民が盛んになると，人に加えて写本も移動するようになった。サージェントもハドラマウト視察中に，インドネシアへ写本が移動した例があることを報告している[8]。逆に，東南アジアで著された著作や，筆写された写本がハドラマウトで見つかることもある。現在でも東南アジアに住んでいるハドラミーの名家の人々の中には写本（またはそのコピー）を集めている人もいる。同様に，ハドラミーが数多く移住しているヒジャーズやUAEにも多くの写本がある可能性は高い。しかしいずれも個人蔵なので，非ムスリムの外国人研究者がアクセスできるかどうかはその時の状況次第である。

もうひとつ忘れてはならないのは，東南アジアなどハドラマウト外で記されたり出版されたりしているハドラミー関連の文献も存在することである。本稿で紹介する伝記集では『結婚の冠』『金の首飾り』（後述）がそれにあたる。インドネシアの場合アラブ系（そのほとんどがハドラミー）は出版業界でのプレゼンスが高く，ハドラミーが設立し，アラビア語書籍を出版している出版社もある。

---

(7) https://www.facebook.com/TarimBookShop/（閲覧日：2021年3月19日）
(8) Serjeant 1950, p. 299.

ジャカルタでは最近，ハドラミーがMajelis Hikmah Alawiyah[9]という団体を作り，そこの図書館にサイイド関係の書籍を集めようとしている。イエメン共和国が内戦状態にあり，ハドラマウトへのアクセスが難しいこと，史料がハドラマウトだけにあるわけではないことを考えると，東南アジアほかの地域における史料収集の可能性は真剣に考える必要がある。

史料の入手方法で近年急速に広まっているのはインターネットの利用である。出版されたものであっても，写本の状態のものでも，アラビア語の史料はインターネットで全文がテキスト化されていたり，PDFほかの形式でダウンロードできたりするものが多く，それらの目的に特化したウェブサイトも複数存在する。大学図書館が所蔵している写本の画像を公開していることもある。古い本であれば著作権の問題は生じないが，近年出版されたものでもPDFファイルが出回っているものもあるため，著作権の問題がクリアされているか不明なことから研究での使用の是非については個別具体的に検討されるべきだろう。

インターネットを通じて史料を入手することが容易になったため，今まで収集した書籍の価値も変動している。以前は出版年が古い希少書は入手が難しく，所持することにも価値があったが，現在ではそういった希少書は著作権が切れているためインターネット上で公開されているものも多い。もっとも有名なサイトはInternet Archive（archive.org）である。一方最近出版された（校訂）本は実物を入手する必要がある。つまり以前と違って書籍の古さと入手しやすさが反比例する状況になっている。

ハドラミー関連の伝記集の形式

ハドラミーに関連する限り，「伝記集（tarājim）」，「列伝（ṭabaqāt）」などの語がタイトルに使用されている書籍は見当たらない。伝記集は他のジャンルの作品の中に現れるのが普通である。ハドラミー関連の伝記集の

(9) https://www.hikmahalawiyah.org/（閲覧日：2021年3月21日）

形式は大きくまとめると以下の４つである。

１．年代記

ハドラマウトの年代記も他の地域同様，出来事を時系列に沿って記述することに重点を置いているものもあれば，名士の伝記を没年ごとに配列した形式（ワファヤート wafayāt）のものも存在する。本稿で以下に紹介する伝記集の中でワファヤートの形式で書かれているのは『首飾り』『情報を明らかにする光』『シフルの歴史』『まばゆい閃光』『宝石と真珠の首飾り』（いずれも後述）である。

前者の種類の年代記でも名士の死去が記録されている。ハドラマウトに関する有名な年代記では『シャンバルの歴史（Tārīkh Shanbal）』『有用な道具（al-ʿUdda al-Mufīda）』『価値のある首飾り（al-ʿIqd al-Thamīn）』が挙げられる。しかしこれらの年代記では出来事に関する記述が多く，名士の死去に関しては名前と死去した日時だけが書かれているものが多いので本稿では取り上げない。

２．サイイドの血統や美徳に関する本

ハドラマウトのサイイド（預言者一族，以下ハドラミー・サイイド）は10世紀半ばにバスラから移住してきたアフマド（Aḥmad b. ʿĪsā al-Muhājir）の子孫で，その孫アラウィーの名前をとって「バーアラウィー（Bā ʿAlawī）」と呼ばれている。彼らは歴史の中でしばしばサイイドの血統や美徳に特化した作品を著すが，そういった著作の中にサイイドの学者やスーフィーの伝記を記述する章が挿入されるものがある。本稿で紹介する伝記集の中では『透き通った宝石』『最上のもの』『渇きを癒す水場』『アインの注釈』『真昼の太陽』（いずれも後述）がそれにあたる。その一方，『引き裂く稲妻（al-Birqat al-Mashīqa）』『宝石の首飾り（ʿIqd al-Yawāqīt）』[10]

---

(10)　これらの著作に関しては別の機会に紹介したい。

は伝記集としては扱えないが，後者は人物によっては伝記が書かれていたり，学者間のイジャーザ（証書）のやりとりが詳しく記されたりしており，知の伝達のネットワークの分析には利用できそうである。本稿ではとりあえず伝記集として扱うことができる著作だけ紹介する。

3．マナーキブ（聖者伝，徳行録）

マナーキブとは学者，スーフィー，聖者などの伝記ではあるが，特に彼らの美徳，徳行，奇蹟に関する逸話に重点を置いた著作をさす。このため「聖者伝」と翻訳されることも多い。ハドラミーのマナーキブのほとんどはサイイドに関するものなので，このジャンルは上記２と密接に関連している。しかしサイイド以外の人物に関するマナーキブも存在すること，サイイドのマナーキブであってもサイイドでない人物の伝記が含まれていることなどから独立したジャンルとして扱う。

マナーキブで扱われる人物は通常１人の学者，スーフィー，聖者，または特定の家系であるが，多くの場合，師，知識を交換した同時代人，弟子の伝記が含まれている。そのような場合，本人に関する記述よりも本人と知識のやりとりをした人物に関する記述の方がはるかに多い。そのため，マナーキブはある人物を軸にした伝記集と考えることができる。本稿で紹介する伝記集の中では『一族のつながり』『結婚の冠』『金の首飾り』『光の輝き』『収穫』（いずれも後述）がこのジャンルに入る。

4．伝記集

上述の通り，ハドラマウトでも実質的な伝記集は多く著されているが，純然たる伝記集はほとんど存在しない。また伝記集の多くは学者，スーフィーなど宗教者に関するもので，詩人，文人，官僚，部族の伝記集はほとんど存在しない。ハドラミーについても書かれている伝記集としてはサハーウィーの『輝く光（al-Ḍawʾ al-Lāmiʿ）』やムヒッビーの『事績の概要（Khulāṣat al-Athar）』が挙げられるが，両方ともハドラミーではない著者

によって著されたものであり，ハドラミーについての記述は他の情報源からの引用だと考えられる。両作品については別の機会に取り上げたい。『詩人たちの歴史』（後述）はハドラミーによって著された詩人の伝記集であるが，後述の通りハドラマウトの外で，ハドラミー以外の人びとに対して書かれたものである。

最後に，ある作品への注釈が実質的に伝記集としての役割を果たしているものがある。『真昼の太陽』の1984年版や『あこがれの旅』（いずれも後述）がそれにあたる。

ハドラミー関連の伝記集

本節ではハドラミー関連の伝記集を紹介する。伝記集は上記のジャンルに関係なく著者の没年順に並べてある。最初にラテン文字で転写した書名を，その後括弧の中に書名の翻訳を，そして二重鉤括弧の中に本稿における書名の略称を記す。またサージェントの目録の中に言及があるものについては脚注でその旨記してあるので，異なるタイトルの写本の存在や著者情報の参考にしてほしい。

ここで紹介する伝記集はハドラミーの伝記に関する基本的な文献であり，かつ私が所持していたり，閲覧したりしたものを中心にしている。ハドラミーを扱った伝記集は現在でも新たなものが著されたり，写本が校訂・出版されたりしている。より網羅的な目録は将来の課題としたい。

各書籍には内容の簡単な説明と，使用するにあたっての注意を付けているが，私の今までの研究テーマであるアッタース家に関する情報に引きつけて説明しているものもあるため，説明の量と内容に偏りがあることはここでお断りしておく。伝記が書かれている人物の人数は，本の中で番号が振られているものを除いて，私が本の目次をもとに数えたもので，大まかな目安と考えてほしい。

1．*al-Jawhar al-Shaffāf*（高貴なサイイドの血統に関する透き通った宝石）

『透き通った宝石』[11]

著者：ʿAbd al-Raḥmān b. Muḥammad al-Khaṭīb（795–855 A.H. / 1392/3–1451/2 C.E.）

本書はハドラミー・サイイドに関する著作で，その後の同種の著作や伝記集，たとえば『首飾り』（後述）でも頻繁に引用されている。本書から『最上のもの』『渇きを癒す水場』（後述）へと，サイイドの伝記作品で，著者がそれぞれ9世紀，10世紀，11世紀に死去している作品が続くが，3作品の内容を比較することによって，サイイドの伝記の発展を分析できるのではないかと考えている。

本書はまだ出版されていないが，写本は広くハドラミーの間で出回っているようである[12]。私の手元にあるものは写本のコピーで，タリームで購入した。他の書籍における本書の引用を見るかぎりサイイドの伝記が収められていると考えられるが，私はまだ分析を始めていないため，ここでは書名を挙げるにとどめる。

2．*Qilādat al-Naḥr fī Wafayāt Aʿyān al-Dahr*（時代の名士たちの死去に関する首飾り）『首飾り』[13]

著者：al-Ṭayyib b. ʿAbd Allāh b. Aḥmad b. ʿAlī Bā Makhrama（870–947 A.H. / 1465–1540 C.E.）

本書はイスラーム世界の名士のワファヤートである。著者はアデン生まれの学者で，当地でカーディーを務めていたが，父がハドラマウトのハジャライン（al-Hajarayn）出身であるため，ハドラマウトとのつながりも強い。本書はヒジュラ暦元年から927年（西暦622–1521年）までの，イスラーム世界各地の4,000人を超える名士の伝記と，各時代における出来事をまとめたものだが，20年ごとに時代を区切り，

(11) Serjeant 1950, p. 582.
(12) *ibid.*, p. 582.
(13) *ibid.*, pp. 289–91.

各時代の名士の伝記を没年ごとに述べた後，その時代の出来事を記述するというスタイルをとっている。たとえばヒジュラ暦８世紀ならば701–720年，721–740年……と時代を分けていき，最初は当該の時代に没した名士の伝記を，その後にその時代の出来事を記述している。このようにイスラーム世界全体の歴史をカバーしようとしているが，著者が重点を置き，かつ史料性が高いのはイエメンとハドラマウトに関する記述である。両地域で生きた人びとに関する伝記を書く時には著者本人が得た情報[14]に加え，現在でも未出版であったり既に失われたりした史料も引用している。伝記集とは言っても聖者伝としての性格が強い『渇きを癒す水場』（後述）の記述と比較すると，取り上げられている人物の経済活動や資産状況，政治的立場，有力者との関係にも光があてられている。

本書は永らく写本の状態だったが，2004年にサナアで，2008年にジッダで校訂本が出版された。どちらの版も人物に番号が付されており，参照し易くなっている。しかし取り上げられている人物の数は２つの版で異なっている。本稿執筆時点でより広く参照されているのは2008年の版で，冒頭に著者の伝記や本書の位置づけに関する論考が収録されている[15]。

本書はイエメンやハドラマウトなど南アラビアの歴史に関する貴重な情報源であり，内容を解析することで今後も新たな知見を得ることができると考えられる。日本では栗山保之がライデン大学に所蔵されている写本のマイクロフィルムを入手し，イエメンの専門家と講読会を開催していたが，当該写本がカバーしている時代はヒジュラ暦501年から920年までで，含まれている名士の数は2,239人とのことである[16]。おそらく全体の中から本書の価値が最も高い時代が抜き出され

---

⑭　たとえば著者の兄弟であるアフマドの伝記も収録されている。Bā Makhrama 2008, vol. 6, pp. 541–2.

⑮　Bā Makhrama 2004; Bā Makhrama 2008.

ているものと考えられる。

3．*al-Ghurar: Ghurar al-Bahāʾ al-Ḍawī wa-Durar al-Jamāl al-Badīʿ al-Bahī fī Dhikr al-Aʾimma al-Amjād*（最上のもの：栄光の大学者について述べることに関する華麗で最上のものと素晴らしい美しさの真珠）『最上のもの』[17]

著者：Muḥammad b. ʿAlī Kharid（890–960 A.H. / 1485/6–1552/3 C.E.）

本書はサイイドの血統，知識の伝達，名前，詩，伝記，美徳等についての本である。サイイドの伝記が書かれているのは第3章で，87名のサイイドが支族ごとに取り上げられ，生年，没年，子供や子孫，読んだ本，師，弟子，著作，発言，詩について記述されている。またサイイドと関係があった非サイイドの学者（サイイドに対してシャイフと呼ばれている）についても少数ながら言及されているが，これは両集団間の密接な関係を示すものと考えられる。第4章は個々のサイイドのマナーキブ（美徳，徳行）に関する逸話が収録されている。本書は通常の伝記とマナーキブを分けて述べているところに特徴がある。またハドラミー・サイイドだけではなくファーティマ，アリー，ジャアファル・アル＝サーディクなどハドラミー・サイイドの祖先や，第3章で取り上げられなかった人物の逸話も収録されている。第3章と第4章は相互に補完関係にあると言えるだろう。現在ではサイイドの伝記については後に成立した『渇きを癒す水場』（後述）が引用されることが多いが，『透き通った宝石』と並んでサイイドの歴史にとって重要な文献である。

本書は今までに2回出版されている[18]。

---

⑯ 「イスラーム地域研究5班，5b「歴史の中のイスラーム」の「ミクロへの接近」」（http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~5jimu/old/reports/981114-j.html 閲覧日：2021年3月14日）

⑰ Serjeant 1950, p. 582.

4．*al-Nūr al-Sāfir ʿan Akhbār al-Qarn al-ʿĀshir*（10世紀の情報を明らかにする光）『情報を明らかにする光』

著者：ʿAbd al-Qādir b. Shaykh b. ʿAbd Allāh al-ʿAydarūs（978–1038 A.H. / 1570–1628/9 C.E.）

本書はヒジュラ暦10世紀に関する情報を，同時代に死去した名士の伝記と，主要な出来事によって記述した歴史書である。死去が報告されている人物の数は200名を超えるが，人生についての記述があるのはそのうち一部である。著者は「アイダルース」という家系名から推察される通りハドラミー・サイイドであるが，インドのアフマダーバードで生まれ，同地で死去した[19]。当時のインド西部，特にグジャラート地方近辺はハドラミー・サイイドの中でもアイダルース家のメンバーが多数移住しており[20]，著者も移住者の子孫としてインドで生を受けたものと考えられる。序文によると本書で取り上げられている人物はエジプト，シリア，ヒジャーズ，イエメン，ルーム（アナトリア），インドなど広範囲にわたっているが，著者の出自や人的交流を反映してハドラミーの伝記も多い。著者はハドラマウトでも有数のスーフィーであるアブー・バクル（al-Shaykh Abū Bakr b. Sālim 919–992 / 1513–1584）の同時代人で，アル＝シッリー（下記）が『渇きを癒す水場』でアブー・バクルの伝記をまとめる前にどのような情報が知られていたのかも知ることができる。また914年の出来事に関する部分ではイスラーム以前からのハドラマウトの歴史やサイイドの中心地タリームについても簡潔に記述されている。いずれにしてもヒジュラ暦10世紀のハドラマウトやハドラミーに関する貴重な情報源であり，本書の内容は他のハドラミーにも頻繁に引用されている。

---

⑱　Kharid 1984/5; Kharid 2007.

⑲　al-Ziriklī 2002, vol. 4, p. 39ではハドラマウトに住んでいたがアフマダーバードに移住したと書かれている。

⑳　栗山 2004。

本書は1934年にバグダードで出版された後，異なる版のものも含めて複数回出版されている[21]。

5．*Tārīkh al-Shiḥr wa-Akhbār al-Qarn al-ʿĀshir*（シフルの歴史と10世紀の情報）『シフルの歴史』[22]

著者：Muḥammad b. ʿUmar al-Ṭayyib Bā Faqīh（970 - ? A.H. / 1562/3 C.E. - ?）

本書はヒジュラ暦10世紀におけるシフル（ハドラマウトの主要な港）の歴史を，その時代に死去した名士の伝記を中心に著したものである。上記『情報を明らかにする光』と『まばゆい閃光』（下記）とともに，ヒジュラ暦10世紀の貴重な記録で，多くの著作で引用されている。死去が記述されている名士の人数は257名であるが，それぞれの人物についての記述の量はまちまちである。本書はシフルの出来事や名士に重点を置いているため，他の出来事やシフル以外の名士については他の史料に頼っている。また，シフルの歴史であってもバー・サンジャラ（Bā Sanjala）の年代記『価値のある首飾り』に依拠している部分も多い。

本書は1999年に校訂本が出版された。その題名は上記の通りだが，元になったのは著者のものとされている異なるタイトルの複数の写本である[23]。

6．*al-Mashraʿ al-Rawī fī Manāqib al-Sāda al-Kirām Āl Abī ʿAlawī*（高貴なサイイド，バーアラウィー一族の美徳に関する渇きを癒やす水場）『渇きを癒す水場』[24]

---

(21) al-ʿAydarūs 1934.

(22) Serjeant 1950, pp. 292–5.

(23) Bā Faqīh 1999. 本書の異なるタイトルの写本については Serjeant 1950, pp. 292–5参照。

(24) Serjeant 1950, p. 581.

著者：Muḥammad b. Abī Bakr b. Aḥmad al-Shillī（1030-1093 A.H. / 1621-1682 C.E.）

本書はハドラマウトのサイイド，バーアラウィー一族の歴史を記した本である。まず第１章ではサイイドの血統や，各地を移動した後ハドラマウトのタリームに落ち着くまでの経緯が記され，続く第２章ではハドラミー・サイイドの名士284名の伝記を記している。この伝記は参照文献としての機能をもたせるため，人物は名前順に並べられている。各々の伝記は，血統，師，弟子，知を求める旅，逸話，奇蹟等で構成されている。サイイドの偉業を称えるという目的も持った本であるため，各人の高貴さ，気前の良さ，寛大さ，高潔さ，信心深さ，徳の高さなど美徳を称える表現が続き，多少冗長ではある。著者の他の著作における記述と比較すると，マナーキブ文学の「作法」を知ることができるだろう。いずれにしても，本書は17世紀までのハドラミー・サイイドの名士を知るための基本的な文献であり，他の文献でも盛んに引用されている。

本書は私が知る限り２回出版されている。最初の出版はヒジュラ暦1319年（西暦1901/２年）で，archive.org で PDF ファイルが入手できる[25]。また私がタリームでアブドゥルラフマーン・バルファキーフ氏から個人的に購入したのはこの版の複製版なので（出版社，出版年は未記載），原本以外にも複製版が流通していた可能性がある。より新しい版は1982年にジッダで出版されたが[26]，サウジアラビアで出版されたためであろう，奇蹟に関する記述が意図的に削られており，削られた箇所は脚注にその旨記されている。フォントや書式という点では1982年版の方が読みやすいが，上記の通り意図的な欠落があり，さ

---

(25) al-Shillī 1901/2. PDF の URL は https://archive.org/details/ElMachra3Elrrawi/Ba3laoui01/（閲覧日：2021年３月14日）。出版から120年が経過しているため著作権上は問題ないと判断して URL を提示した。

(26) al-Shillī 1982.

らに原文にはなかったハムザが間違った位置に挿入されているなど欠点も多い。また1982年版の最後に付けられている人名索引は厳密な名前順になっていないため使い物にならない。この版を使用する際には1901/2年版も併用する必要がある。

7．*al-Sanāʾ al-Bāhir bi-Takmīl al-Nūr al-Sāfir fī Akhbār al-Qarn al-ʿĀshir*（10世紀の情報について『情報を明らかにする光』を補完するまばゆい閃光）『まばゆい閃光』[27]

著者：Muḥammad b. Abī Bakr b. Aḥmad al-Shillī（1030–1093 A.H. / 1621–1682 C.E.）

本書は題名から分かる通り，『情報を明らかにする光』を補完する目的で執筆され，ヒジュラ暦10世紀に死去した名士の伝記と主な出来事が記述されている。このうち出来事に関する記述はごくわずかなので，基本的にはワファヤートと考えて差し支えない。取り上げられている名士は650名を超えており，ハドラミーのほか，エジプトの名士，たとえばカイロにいたアッバース家のカリフについても言及がある。全体の量は『情報を明らかにする光』よりも多い。本稿では本書の著者と同じ人物の著作3点を紹介しているが，『宝石と真珠の首飾り』（後述）はヒジュラ暦11世紀についてのものなので本書と情報が重複することはない。一方『渇きを癒やす水場』は時代に関係なく著者の時代までのサイイドの名士を取り上げているため，記述されている人物が重複することもある。しかし『渇きを癒やす水場』をそのまま引用しているわけではない[28]。本書，『情報を明らかにする光』，『シフ

(27) Serjeant 1950, p. 583.

(28) たとえば『まばゆい閃光』に収録されているアブドゥルラフマーン（ʿAbd al-Raḥmān b. ʿAbd Allāh Bā ʿAlawī）の伝記では，同人物の伝記をすでに『渇きを癒す水場』中で書き，そちらの記述の方が簡潔である旨明記されている。al-Shillī 2004, pp. 34–5。同人物の『渇きを癒やす水場』中の伝記は al-Shillī 1901/2, vol. 2, p. 129参照。

ルの歴史』とヒジュラ暦10世紀のハドラミーに関連した伝記集は複数あるので，史料ごとの引用状況や記述の違いを分析することで，この時代のハドラミーの人物像をより立体的に把握できる可能性がある。

本書は2004年にサナアで出版されている[29]。

8．*ʿAqd al-Jawāhir wa-al-Durar fī Akhbār al-Qarn al-Ḥādī ʿAshar*（11世紀の情報に関する宝石と真珠の首飾り）『宝石と真珠の首飾り』[30]
著者：Muḥammad b. Abī Bakr b. Aḥmad al-Shillī（1030–1093 A.H. / 1621–1682 C.E.）

本書はヒジュラ暦1001年から1093年（西暦1592年から1682年）の間に死去した名士321名の伝記を没年ごとに並べた伝記集である。また，年によってはハドラマウトやマッカで起こった事件に関する簡単な記述もある。著者は『渇きを癒やす水場』，『まばゆい閃光』（後述）の著者と同一人物であるが，『渇きを癒やす水場』がハドラミー・サイイドだけの伝記を集めたのに対し，本書はサイイド以外のハドラミーや，他地域の人物の伝記も含んでいるのが特徴である。特にマッカやインドの情報を含んでいる理由は，著者が両地域に滞在して学問を修めたことであろう。本書は2003年にタリームで，その後2014年にリヤドで出版されているが，私は2014年版は未見である[31]。

9．*Sharḥ al-ʿAyniyya Naẓm Sayyidinā al-Ḥabīb al-Quṭb ʿAbd Allāh b. ʿAlawī al-Ḥaddād Bā ʿAlawī*（我らの主，愛される枢軸，アブドゥッラー・ビン・アラウィー・アル＝ハッダードによってアインの韻で書かれた詩の注釈）『アインの注釈』[32]

---

(29) al-Shillī 2004.
(30) Serjeant 1950, p. 583.
(31) al-Shillī 2003; al-Shillī 2014.
(32) Serjeant 1950, p. 582.

著者：Aḥmad b. Zayn b. ʿAlawī al-Ḥabshī, 1069-1144 A.H. / 1658/9-1732 C.E.）

本書はハドラマウトで最も有名な学者・スーフィー，アブドゥッラー・アル＝ハッダード（ʿAbd Allāh b. ʿAlawī al-Ḥaddād 1044-1132 A.H. / 1634-1720 C.E.）が書いた，アインで韻を踏むカシーダの注釈である。著者はこのアブドゥッラーの弟子で，在命中はハドラマウトで最も有名な学者・スーフィーの１人であった。現在は彼が設立した聖域（ハウタ）の墓地に埋葬され，そこに廟が建てられている[33]。本書は伝記集として著されたものではないが，当該のカシーダの読み解きとともに，名士の伝記や言葉も収録されている。しかし全てがハドラミーというわけではなく，歴代の著名なスーフィーやスンナ派四法学派の名祖などの伝記も多い。

アッタース家に関して言えば，家系の実質的な始祖であるウマル・アル＝アッタース（ʿUmar b. ʿAbd al-Raḥmān al-ʿAṭṭās ca. 992-1072 A.H. / ca.1584/5-1661 C.E.）の伝記が収録されている。ウマルの本格的なマナーキブである『一葉の書（al-Qirṭās fī Manāqib al-ʿAṭṭās）』よりも前に書かれた伝記なので，本書の著者の時代にウマルがどのような位置づけだったのかを推測する手がかりになる。

本書はインドネシアのスラバヤで出版された。私が所持しているのは2007年に出版された第２版である[34]。初版については，2001年にタリームで購入したコピーの後半部分が手元にあるが，ざっと見たところ初版と第２版で内容に大きな変更はないようである。

10. *Shams al-Ẓahīra fī Nasab Ahl al-Bayt min Banī ʿAlawī Furūʿ Fāṭima al-Zahrāʾ wa-Amīr al-Muʾminīn ʿAlī, Raḍiya Allāh ʿanhu*（ファーテ

---

(33) ハウタという聖域はハドラマウト各地に存在するが，このアフマドが設定した聖域は現在では特に「ハウタ村」と呼ばれている。

(34) al-Ḥabshī 2007.

ィマとアリーの家の支族，「お家の人びと」の中のアラウィー一族の血統に関する真昼の太陽）『真昼の太陽』[35]

著者：ʿAbd al-Raḥmān b. Muḥammad al-Mashhūr（1250–1320 A.H. / 1834–1902 C.E.）

本書はハドラミー・サイイドの血統に関する本である。著者は各家系で記録されていた血統をまとめた詳細な系図も作成したが，本書はその要約版と位置づけられる。本書の特徴はハドラミー・サイイドの家系全てを網羅していることで，家系同士の関係をつかむことができる。その一方，一冊の本ではサイイドの全てのメンバーをカバーすることはできないので，本書の中で名前が挙げられているのは各家系の有力者や血統上の分岐点にあたる人物だけである。また，取り上げられている人物であっても伝記が書かれているわけではなく，血統，ラカブ（あだ名），子孫がどこに住んでいるかについての簡単な情報が示されているだけである。

以上の理由から本書は伝記集とは言えない。しかし，1984年にジッダで出版された版（全２巻）[36]ではインドネシア在住のハドラミー・サイイド，ムハンマド・ディヤー・シハーブ（Muḥammad Ḍiyāʾ Shihāb）によって本文を遥かに超える長さの注釈が付けられており，本文の中で言及されている人物や，本書が書かれた後に現れた名士の伝記が書かれている。また，巻末には人物名の索引が付けられているので，第３版についてはハドラミー・サイイドの伝記集としても使用できる。しかし注釈の情報は誤りも目立つので注意が必要である[37]。

本書は1906年にインドのハイデラバードで石版出版された。その後

---

(35) Serjeant 1950, p. 582.

(36) al-Mashhūr, ʿAbd al-Raḥmān b. Muḥammad 1984.

(37) たとえばアッタース家の場合は最初に「アッタース」というラカブ（あだ名）で呼ばれた人物がアブドゥルラフマーンであると書かれているが，正しくは彼の父アキールである。al-Mashhūr 1984, p. 247 f.n. さらに当該部分の引用が他の著作物にも見られ，家系の成立に関する誤った情報が広まっている。

1953年にスラバヤでいくつかの論考が足された版が出版され，さらに1984年に上記の版が出版された[38]。また，本書の本文を見やすい書式に書き直したものなど派生文献も出版されており，ハドラミー・サイイドの歴史を研究する上では必須の文献である。

11. *Kitāb Ṣilat al-Ahl bi-Tadwīn mā Tafarraqa min Manāqib Banī Faḍl*（ファドル家の美徳を書き留めることに関する一族のつながり）『一族のつながり』

著者：Muḥammad b. ʿAwaḍ Bā Faḍl（1303–1369 A.H. / 1885–1950 C.E.）

本書はハドラマウトのバーファドル家の学者の伝記集である。著者はハドラマウトの宗教・学術活動の中心地，かつサイイドの活動の中心地であるタリームで生まれ，同地で学者として名を成した。また彼は彼の時代にハドラマウトで最も有名な学者・スーフィーのひとり，アフマド・ビン・ハサン・アル＝アッタース（Aḥmad b. Ḥasan al-ʿAṭṭās 1257–1334 A.H. / 1841–1916 C.E.）の愛弟子としても知られている。ハドラマウトの学者やスーフィーの伝記集の多くはサイイドによる，サイイドについてのものであるが，バーファドル家はタリームを中心に活躍するシャイフの一家系である[39]。本書はバーファドル家の学者129名の伝記で構成されており，サイイドの学者との関係も語られている。シャイフの家系が自分たちの歴史を伝記集の形で語った

---

(38) al-Mashhūr 1984, p. 5. この1906年版は私は未見であるが，1911年に出版された版はライデン大学図書館で閲覧した。al-Mashhūr 1329 A.H. [1911]. スラバヤで出版された版も2013年にマドゥラ島にあるアラブ系の家で閲覧することができた。

(39) サイイドとシャイフは社会の中での役割という点ではライバル関係にあるので互いに対立しつつも，知識の交換や婚姻を通じて密接な関係を保ってきた。他のシャイフの家系はアムーディー（al-ʿAmūdī）家，バーワズィール（Bā Wazīr）家，ハティーブ（al-Khaṭīb）家，バーアッバード（Bā ʿAbbād）家などである。このうちハティーブというラカブはサイイドにも用いられることがあるので注意が必要である。

という点でも有用な史料である。

本書は1999/2000年に著者の家系の人物が出版した[40]。

12. *Tārīkh Shuʿarāʾ al-Ḥaḍramyyīn*（ハドラマウトの詩人たちの歴史）『詩人たちの歴史』[41]

著者：ʿAbd Allāh b. Muḥammad b. Ḥāmid al-Saqqāf,（d. ca.1960 C.E.）

本書は書名の通り，ハドラマウトの詩人たちに焦点を当てた本で，207名の伝記が収められている。著者はハドラミー・サイイドの有力家系，サッカーフ家の人物であるが，人生について多くは知られていない[42]。詩人の伝記集はイスラーム世界では数多く編纂されているが，ハドラマウトについては本書が当該ジャンルで最初のもののようである。とは言っても本書が出版されたのは20世紀に入ってからであり，その元になった原稿はアレキサンドリアで発行されていた新聞『アル＝ラシュディーヤート（al-Rashdiyyāt）』での連載である[43]。つまり，本書はもともとはエジプトで，ハドラミー以外の人びとにハドラマウトの詩作の伝統を紹介する目的をもって書かれたものであり，ハドラマウトでは詩人の伝記集を編纂する伝統はなかったと言える。その理由のひとつは，詩人とは言っても多くの場合学者やスーフィーでもあったし，学者やスーフィーは作詩をするのが普通だったので，両者を分ける必要はなかったからだと考えられる。ただ，詩人という軸で編纂された伝記集なので，本書にはイスラーム以前，さらに紀元前の人物も含まれている。この点は本稿で紹介した他の伝記集には見られない特徴である。

本書は全５巻で，古い時代から新しい時代へと各詩人が活躍した時

---

(40) Bā Faḍl 1999/2000.

(41) Serjeant 1950では参照文献として使用されている。

(42) al-Ziriklī 2002, vol. 4, p. 135.

(43) al-Saqqāf 1997/8, vol. 1, p. 2.

代順で伝記が並んでいる。各巻の目次を見ると，ある時期を境にサイイドの詩人の割合が格段に高まっているのが分かる。各伝記の内容は，血統，略歴，師，弟子，著作，散文の抜粋と，その人物が作った詩の抜粋である。各巻末には目次が付いている。参照文献として編纂されたわけではないので，特定の人物の伝記を探すのには時間がかかるが，ハドラマウトの著名なウラマーの人生が簡潔に記述されているため，伝記集としての有用性も高い。

本書の初版はカイロで出版されたが，ヒジュラ暦1418年（西暦1997/8年）に1冊にまとめられてサウジアラビアのターイフで再販された[44]。また2004年にカイロでも出版（再販）されているようだが私は未見である。

13. *Riḥlat al-Ashwāq al-Qawiyya ilā Mawāṭin al-Sāda al-ʿAlawyya*（アラウィー・サイイドの故郷への強いあこがれの旅）『あこがれの旅』[45]
著者：Bā Kathīr, ʿAbd Allāh b. Muḥammad（1276-1343 A.H. / 1859/60-1925 C.E.）

著者は東アフリカで生まれたハドラミーの学者，スーフィーで，自身の家系はサイイドではないが，サイイドが中心になって活動しているアラウィー・タリーカの一員であった。本書は著者が1897年に，ハドラミー・サイイドの故郷ハドラマウトを旅した時の旅行記（リフラ）である。その内容自体も興味深いが，伝記集のひとつとして本稿で取り上げる理由は，そこに出てくる人物について，『詩人たちの歴史』の著者でもあるアブドゥッラー・アル＝サッカーフが詳細な注釈を付けていることである。注釈の量は本文をはるかに上回り，実質的にはサイイドを中心とするハドラミーの伝記集としても使用されている。伝記が書かれているのは58人で，ほとんどがサイイドであるが，

(44) al-Saqqāf 1997/8.
(45) Serjeant 1950では参照文献として使用されている。

非サイイドの学者やスルターンの伝記もある。『詩人たちの歴史』で取り上げられている人物と同じ人物の伝記もあるが，ざっと比較したところ，全く同じ文章ではないようである。本書は1939/40年にザンジバールで出版された[46]。

14. *Tāj al-Aʿrās fī Manāqib al-Ḥabīb al-Quṭb Ṣāliḥ b. ʿAbd Allāh al-ʿAṭṭās*（ハビーブ・枢軸であるサーリフ・ビン・アブドゥッラー・アル＝アッタースの美徳に関する結婚の冠）『結婚の冠』[47]

著者：ʿAlī b. Ḥusayn al-ʿAṭṭās（1309–1396 A.H. / 1891–1976 C.E.）

本書はハドラマウトのワーディー・アムドの聖者，サーリフ・アル＝アッタース（Ṣālih b. ʿAbd Allāh al-ʿAṭṭāṣ 1211–1279 A.H. / 1796/7–1862 C.E.）のマナーキブである。著者のアリー・アル＝アッタースはハドラマウトのフライダで生まれたが，20世紀前半に現在のインドネシアに移住し，1976年にジャカルタで死去した。現地では住んでいた場所にちなんで「アリー・ブングル（Ali Bungur）」として知られている。本書はアラビア語の著作であるが，インドネシアで執筆され，ジャワのクドゥスで２巻本として出版された[48]。活字ではなく手書きの原稿を写真製版したというのが本書の特徴のひとつである。本文の総ページ数は1,653頁（第１巻798頁，第２巻855頁）だが，サーリフ本人の人生，血統，家族，偉業，奇蹟に関する記述（第１～３，７章）の量は限られていて，ほどんどの部分はサーリフとの間で直接・間接を問わず知識の伝達があった人物の伝記で占められており，第４章（250頁）には師31人，第５章（291頁）には知識を交換した同時代人101人，第６章（867頁）には弟子・孫弟子160人の伝記が含まれて

(46) Bā Kathīr 1939/40.

(47) Serjeant 1950, p. 588に，本書のもとになったと考えられるマナーキブが紹介されている。

(48) al-ʿAṭṭās 1979.

いる。特に頁数で言えば本書の半分以上を占める第6章はサーリフから直接教えを受けた人物だけではなく，知識の伝達が何らかの形でなされている人物をなるべく広範囲に取り上げようとしている。

以上の特徴から，本書は19世紀から20世紀にかけての，あるハドラミーの学者と学問的な関わりがあった人びとの記録と言える。本人が直接見聞きした情報が多く含まれているので史料としての独自性は高い。しかし取り上げられている人物には偏りがある。まず，伝記が語られる人物のほとんどがハドラミーである。さらにハドラミーとは言ってもほとんどがサイイドであり，さらに著者の家系であるアッタース家の人物が多くを占めている。地理的な偏りもあり，東南アジアに移住したり東南アジアで生まれたりしたハドラミーの宗教者の伝記は多数含まれているが，インドや東アフリカなど，東南アジア以外の地域の情報はあまりない。これは著者の経歴から言って自然であろう。

さらに，アッタース家の人物の中でも取り上げ方に偏りがある。東南アジアのアラブ（≒ハドラミー）の名士ではあったが宗教者としては知られていない人物については，詳細に語られることはない。たとえば実業家として知られているアブドゥッラー・アル＝アッタース（ʿAbd Allāh b. ʿAlawī b. ʿAbd Allāh al-ʿAṭṭās ca. 1849–1929）（バタヴィア）やハサン・アル＝アッタース（Ḥasan b Aḥmad al-ʿAṭṭās 1832–1932）（マレーシアのパハンとジョホール）は伝記の項目としては取り上げられていない。二人は宗教的な活動も行っており，アブドゥッラーにいたってはハドラマウトにおけるアッタース家の有名な学者，アフマド・ビン・ハサン・アル＝アッタース（上述）からも学んでいるほか，マウリド（預言者の生誕を賛美する詩）も作っているが，マナーキブに取り上げるほどの重要性はないと判断されたのだろうか。またジャワのスカブミで活動していたシャイフ・アル＝アッタース（Shaykh b. Sālim al-ʿAṭṭās 1893–1978）への言及が見られないのも謎である。

このように取り上げられている人物や地域には偏りがあるが，著者本人は人名録として使用できるような網羅的な伝記集を書くことを目的としていたわけではないだろうし，上記のような偏りが見られるのは伝記が多数含まれているマナーキブとしてむしろ普通のことであろう。そういった偏りも意識しながら史料として扱うのであれば，本書は19世紀から20世紀にかけてのハドラマウトと東南アジアにおけるハドラミー・サイイドのネットワークを分析するための貴重な情報源と言える。

伝記の並び方は上記の通りサーリフ・アル＝アッタースとの関係（師なのか，同時代人なのか，弟子なのか）によって章が分けられているが，各章の伝記は名前の順に並んでいるわけではないので参照資料として利用するには自分で目録を作成する必要がある。各伝記の内容は人物の名前（血統），出生地，埋葬された場所，サーリフ・アル＝アッタースとの関係，師，知識を交換した同時代人，弟子，顕著な功績，奇蹟，その他の逸話である。ハドラミー・サイイドの場合，伝記の冒頭で示される名前は血統が分かる形で書かれ，アッタース家の人物の場合は家系の実質的な始祖であるウマル・ビン・アブドゥルラフマーン・アル＝アッタース（上述）まで遡る血統が書かれている。また，伝記と併せてハドラマウトや東南アジアの出来事についての記述もある。

15. *Ṣafaḥāt min al-Tārīkh al-Ḥaḍramī*（ハドラマウト史の諸頁）『ハドラマウト史の諸頁』

著者：Saʿīd ʿAwaḍ Bā Wazīr（1333–98 A.H. / 1915–78 C.E.）

本書はイスラーム初期から著者の時代までのハドラマウトの歴史を，さまざまな分野の名士の伝記で語ったものである。含まれている伝記の数は21と少なく，本稿の趣旨に合う伝記集ではないかもしれないが，21名の中でサイイドが１人だけしか含まれていないという特徴を持っ

ているので紹介しておきたい。著者の家系，バーワズィール家はハドラマウト沿岸部のガイル・バーワズィール（Ghayl Bā Wazīr）に集中して住んでいる。家系の名前の由来は，アッバース朝のワズィール（大臣）を起源に持つと考えていることによる。ハドラマウトの歴史記述，または本稿の趣旨に照らし合わせればハドラマウトの名士の伝記はサイイドによって半ば独占されてきた。当然サイイドに関する記述が多くなるが，本書は伝記が書かれる人物の選定によって，サイイドとは別の歴史観を提示したと言ってよい。言い換えれば伝記集が果たす役割の可能性を示したのが本書である。これに対して異議申し立てをしたいサイイドもいるだろうが，本書もハドラマウト史に関する重要な本と考えられており，現在まで少なくとも３回出版（再販）されている[49]。

16. *al-ʿUqūd al-ʿAsjadiyya fī Nashr Manāqib baʿḍ Afrād al-Usra al-Junaydiyya*（ジュナイド家の人びとの美徳を広めることに関する金の首飾り）『金の首飾り』

著者：ʿAbd al-Qādir b. ʿAbd al-Raḥmān b. ʿUmar al-Junayd（1345-? A.H. / 1927-? C.E.）

本書はハドラミー・サイイドのジュナイド家の学者やスーフィーの人生を，彼らの師，同時代人，弟子に関する記述も交えながら著したものである。東南アジアではジュナイド家の人物はシンガポールに多く住んでおり，本書もシンガポールで1994年に出版された[50]。本書の本文には見出しは付けられているものの，目次や索引がないため，伝記集として使用するのは若干困難である。しかし東南アジアを含むジュナイド家の歴史，さらにハドラミー・サイイドを中心とするウラマーのつながりを知るための重要な史料であることは確かである。

---

(49) Bā Wazīr n.d.

(50) al-Junayd 1994.

17. *Lawāmiʿ al-Nūr: Nukhba min Aʿlām Ḥaḍramawt*（光の輝き：ハドラマウトの精選された名士）『光の輝き』

著者：Abū Bakr al-ʿAdanī b. ʿAlī b. Abī Bakr al-Mashhūr（1366-A.H.[51] / 1946/7- C.E.）

本書はヒジュラ暦1341年（西暦1922/3年）に死去したウラマー，アラウィー・アル＝マシュフール（ʿAlawī b. ʿAbd al-Raḥmān al-Mashhūr）の伝記を通してハドラマウトの名士たちの活動を記述したものである。上記『結婚の冠』同様，１人のサイイドの伝記を軸としつつも，彼の師62人，知識を交換した同時代人33人，弟子145人の伝記が収録されている。『結婚の冠』が東南アジアに重点を置いているのに対し，本書はインドや東アフリカの情報が入っているのが特徴である。本書は２巻本で1990年頃に出版されたが，私の手元にあるのは合冊されたものである[52]。

18. *Jany al-Qiṭāf min Manāqib wa-Aḥwāl al-Imām al-ʿAllāma Khalīfat al-Aslāf ʿAbd al-Qādir b. Aḥmad b. ʿAbd al-Raḥmān al-Saqqāf*（イマーム・大学者・先人たちの後継者，アブドゥルカーディル・ビン・アフマド・ビン・アブドゥルラフマーン・アル＝サッカーフの美徳（マナーキブ）と状態に関する収穫）『収穫』

著者：Abū Bakr b. Alī al-Mashhūr

本書は アブドゥルカーディル・アル＝サッカーフ（ʿAbd al-Qādir b. Aḥmad al-Saqqāf 1331–1431 A.H. / 1913–2010 C.E.）のマナーキブである。著者は『光の輝き』と同じ名前だが，同一人物かどうか確認はとれていない。他のマナーキブ同様，アブドゥルカーディル以外の人物の伝記も含まれている。本書は1998年にマディーナで出版されて

---

(51) ウェブサイト al-Ḥabīb Abū Bakr（http://www.alhabibabobakr.com/about/ 閲覧日：2021年３月17日）

(52) al-Mashhūr, Abū Bakr al-ʿAdanī b. ʿAlī ca. 1990.

いるが[53]，伝記の対象となっている人物の没年を見れば分かる通り，存命中に著されたマナーキブである。

おわりに

伝記集はハドラマウトやハドラミーの歴史を研究する上では中心となる史料のジャンルであり，伝記を書く伝統は現在まで続いている。本稿でも紙幅の制限から紹介できなかった伝記集も多い。それらの伝記集は年代記などハドラマウトの他の史料とともに，別の機会に紹介したい。

参考文献

al-ʿAṭṭās, ʿAlī b. Ḥusayn. *Tāj al-Aʿrās fī Manāqib al-Ḥabīb al-Quṭb Ṣāliḥ b. ʿAbd Allāh al-ʿAṭṭās*. 2 vols. Kudus (Java): Menara Kudus, 1979.

al-ʿAydarūs, ʿAbd al-Qādir b. Shaykh. *Tārīkh al-Nūr al-Sāfir ʿan Akhbār al-Qarn al-ʿĀshir*. Baghdad: al-Maktaba al-ʿArabiyya, 1934.

Bā Faḍl, Muḥammad b. ʿAwaḍ. *Kitāb Ṣilat al-Ahl bi-Tadwīn mā Tafarraqa min Manāqib Banī Faḍl*. n.p.: ʿAlī b. Muḥammad b. ʿAwaḍ Bā Faḍl, 1420 A.H. [1999/2000].

Bā Faqīh, Muḥammad b. ʿUmar al-Ṭayyib. *Tārīkh al-Shiḥr wa-Akhbār al-Qarn al-ʿĀshir*. San ʻa: Maktabat al-Irshād, 1999.

Bā Kathīr, ʿAbd Allāh b. Muḥammad. *Riḥlat al-Ashwāq al-Qawiyya ilā Mawāṭin al-Sāda al-ʿAlawiyya*. Zanjibar: Maṭbaʿat al-ʿUlūm, 1358 A.H. [1939/40].

Bā Makhrama, al-Ṭayyib. *Qilādat al-Naḥr fī Wafayāt Aʿyān al-Dahr*. San ʻa: Wizārat al-Thaqāfa wa-al-Siyāḥa, 2004.

_____. *Qilādat al-Naḥr fī Wafayāt Aʿyān al-Dahr*. Jidda: Dār al-Minhāj, 2008.

Bā Wazīr, Saʿīd ʿAwaḍ. *Ṣafaḥāt min al-Tārīkh al-Ḥaḍramī*. Aden: Maktabat al-Thaqāfa, n.d.

al-Ḥabshī, Aḥmad b. Zayn. *Sharḥ al-ʿAyniyya Naẓm Sayyidinā al-Ḥabīb al-Quṭb ʿAbd Allāh b. ʿAlawī al-Ḥaddād Bā ʿAlawī*. Surabaya: Dār al-ʿUlūm al-Islāmiyya, 2007.

al-Junayd, ʿAbd al-Qādir b. ʿAbd al-Raḥmān b. ʿUmar. *al-ʿUqūd al-ʿAsjadiyya fī Nashr Manāqib baʿḍ Afrād al-Usra al-Junaydiyya*. Singapore: n.d., 1994.

Kharid, Muḥammad b. ʿAlī. *al-Ghurar: Ghurar al-Bahāʾ al-Ḍawī wa-Durar al-Jamāl al-Badīʿ al-Bahī fī Dhikr al-Aʾimma al-Amjād…* [Cairo]: n.d. 1405 A.H.

(53) al-Mashhūr, Abū Bakr b. ʿAlī 1998.

[1984/ 5].

_____. *al-Ghurar: Ghurar al-Bahāʾ al-Ḍawī wa-Durar al-Jamāl al-Badīʿ al-Bahī fī Dhikr al-Aʾimma al-Amjād…* n.p.: n.d. 2007.

al-Mashhūr, ʿAbd al-Raḥmān b. Muḥammad. *Shams al-Ẓahīra al-Ḍāḥiya al-Munīra fī Nasab wa-Silsilat ahl al-Bayt al-Nabawī wa-al-Sirr al-Muṣṭafawī min Banī ʿAlawī* ... Hyderabad: n.d., 1329 A.H. [1911].

_____. *Shams al-Ẓahīra fī Nasab Ahl al-Bayt min Banī ʿAlawī furūʿ Fāṭima al-Zahrāʾ wa-Amīr al-Muʾminīn ʿAlī, Raḍiya Allāh ʿanhu*. with commentary by Muḥammad Ḍiyāʾ Shihāb, 2 vols. Jidda: ʿĀlam al-Maʿrifa, 1984.

al-Mashhūr, Abū Bakr al-ʿAdanī b. ʿAlī. *Lawāmiʿ al-Nūr: Nukhba min Aʿlām Ḥaḍramawt min khilāl Tarjamat Ḥayāt al-Sayyid al-ʿAllāma ʿAlawī b. ʿAbd al-Raḥmān al-Mashhūr al-Mutawaffā Sanat 1341 H*. San ʻa: Maktabat Dār al-Muhājir li-al-Nashr wa-al-Tawzīʿ, [ca. 1990].

al-Mashhūr, Abū Bakr b. Alī. *Jany al-Qiṭāf min Manāqib wa-Aḥwāl al-Imām al-ʿAllāma Khalīfat al-Aslāf ʿAbd al-Qādir b. Aḥmad b. ʿAbd al-Raḥmān al-Saqqāf*. Medina: Dār al-Muhājir, 1998.

al-Saqqāf, ʿAbd Allāh b. Muḥammad b. Ḥāmid. *Tārīkh al-Shuʿarāʾ al-Ḥaḍramiyyīn*. al-Ṭāʾif: Maktabat al-Maʿārif, 1418 A.H. [1997/ 8].

Serjeant, R.B. "Materials for South Arabian History: Notes on new MSS from Ḥaḍramawt," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 13, No. 2 (1950), pp. 281–307 and Vol. 13, No. 3 (1950), pp. 581–601.

al-Shillī, Muḥammad b. Abī Bakr. *ʿAqd al-Jawāhir wa-al-Durar*. San ʻa: Maktabat al-Irshād and Maktabat Tarīm al-Ḥadītha, 2003.

_____. *ʿAqd al-Jawāhir wa-al-Durar*. al-Riyāḍ: Markaz al-Malik Fayṣal li-al-Buḥūth wa-al-Dirāsāt al-Islāmīya, 2014. ※私は未見である。

_____. *al-Mashraʿ al-Rawī fī Manāqib al-Sāda al-Kirām Āl Abī ʿAlawī*. 2 vols. n.p.: n.d., 1318 A.H. [1901/ 2].

_____. *al-Mashraʿ al-Rawī fī Manāqib al-Sāda al-Kirām Āl Abī ʿAlawī*. 2 vols. Jidda: n.d., 1982.

_____. *al-Sanāʾ al-Bāhir bi-Takmīl al-Nūr al-Sāfir fī Akhbār al-Qarn al-ʿĀshir*. San'a: Maktabat al-Irshād, 2004.

al-Ziriklī, Khayr al-Dīn. *al-Aʿlām*. Beirut: Dār al-ʿIlm li-al-Malāyīn, 2002.

栗山保之，「16～17世紀におけるハドラマウトの人びとの移動・移住活動」，『西南アジア研究』，No. 61（2004），47～ 66頁。

谷口淳一，「人物を伝える――アラビア語伝記文学」，林佳世子・桝屋友子編『記録と表象――史料が語るイスラーム世界』，東京大学出版会，2005年，113～ 140頁。

al-Ḥabīb Abū Bakr（http://www.alhabibabobakr.com/ 閲覧日：2021年 3 月17日）
※ Abū Bakr al-ʿAdanī b. ʿAlī al-Mashhūr のウェブサイト。